ダイスで決まる超能力バトル(仮)

デュランダルｖ２

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生はＲＰＧのような視認出来るようなステータスが存在しない、恋愛ゲームのようなフラグは存在しない、戦略ゲームのように明確なパラメーターは存在しない、人生ゲームのように一発逆転も一般人には縁はない。しかし、もしそれが不完全とはいえ現実に出現したらどうなる？欲しい才能を手に入れる？それとも、元々持っている才能を伸ばす？それとも・・・

これは暇をもて余した神が遊びでしかも穴だらけのゲームを遊ばして見ようとしたのだ

「これでいいのか？」

「ＯＫＯＫ、後は興味を持った神々（読者）が意見を言ってくれるといい」

「それじゃ、戻るからな」

と言うことで見切り発車甚だしい神（作者）が他力本願にも読者に意見を求めながら亀更新でお送りする現代異能（？）魔法（？）バトルだといいな

※ダイスは基本ガチ振りだと思ってください

目　次

プロローグ及び設定（仮）
プロローグ　夢か現か？ ―― 1
第1章　4月　入学及び学校生活（仮）
能力確認と犯罪行為 ―― 4
入学式と裏事情 ―― 11

プロローグ及び設定（仮）

プロローグ　夢か現か？

やぁ、初めまして＊＊＊。君で最後だね。

「＊＊＊」

何が最後が最後かだって？そうだね、簡単に言えばこれから君には一般人が本来手に入れる事は出来ない能力を与えるよ。勿論どう使うかは自由だよ。

「＊＊＊」

どんな能力になるかは君の運次第さ。このダイスを振るといい。

「＊＊＊」

出た出目は２２か。英雄シリーズかこのダイスをもう一度振るといい

「＊＊＊」

出た出目は2か。反逆英雄シリーズか。

「＊＊＊？」

簡単に言えば悪党や歴史に残るほどの犯罪者だったり裏切り者をさしたりするシリーズさ。君の能力は石川五衛門か。強力な能力を得たね。

後は５つの能力に対応した技術と５つの自身で選んだ技術を習得出来る。石川五右衛門だと『スリ』『ピッキング』『逃げ足』『小太刀』『変装』だね。自身の技術を選んだかい？

「＊＊＊」

『ハッキング』『魔法』『気功』『目利き』『幸運』か。幸運は技術ではないから適用出来ないし魔法は属性を選んだらいけるよ

「＊＊＊!!＊＊＊？」

勿論、魔法は才能がいるとはいえ技術と言っても差し支えないよ。

『重力魔法』『テレポート』かい？ＯＫＯＫ

「＊＊＊」

まぁ、そういうことさ。ほら、１０こ分のダイス振るといいよ。但

し、『スリ』『ピッキング』『逃げ足』『小太刀』『変装』は５０以下が出ると振り直しで
「＊＊＊」
『スリ』７４　『ピッキング』５３　『逃げ足』７８　『小太刀』７２
『変装』７３　『ハッキング』５７　『重力魔法』６６　『気功』７２
『目利き』９０　『テレポート』７９か。思いっきり能力高いな目利き
何か何処の鑑定団クラスだよって言いたいぐらい高いね。
「＊＊＊」
　マジマジ、それじゃあ、後は才能を上げる方法だけどスマホに見覚えのないアプリから通知が来るからその書かれている事を達成するとさっきみたいなダイスが配られるからそれを使って上げるか相手が持っているダイスを手に入れるか後は大金を積んで買う方法だね後他にも知りたかったら調べるといいそれじゃあ、頑張って

「今の夢は何だったんだ？」
　少年は窓から入り込んだ日差しと昨晩設定した目覚まし時計のアラートで目をさました。少年の夢は自身の声が全く聞こえなかったものの言っている内容はお互いに理解し何か決めていたことは覚えている。その人物がどんな容姿でどんな声だったかは全く覚えていないが
『ピコン』
　スマホから何かの通知音が聞こえてまさか夢と関係ないだろうと思いながら少年は確認した。
「夢でいってたアプリか？」
　少年がスマホの画面を確認するとインストールした覚えのないアプリに１のマークが表示されていた。まさかとおもいアプリを起動させると突然音声メッセージが流れた。
「おはよう、木藤神樹君」
「君はとあるゲームに強制参加が決まった。といってもそこまできつい縛りではないよ」
「ルールは今のところは７つある」

「1：クエストによって自身を成長させるダイスが入手可能」
「2．参加者同士でダイスを賭けた勝負が可能」
「3．相手を無理矢理脅してダイスを入手することを禁ずる」
「4．3を破った場合、強制的にダイスを没収する（消費したダイスも全て）」
「5．最低でも大型クエストには一度参加する事」
「6．ダイスを一般人に受け渡すことは可能」
「7．このゲームを一般人に話した場合、1時間以内にプレイヤーとして参加を強制させないと全てのダイス及びプレイヤー時の記憶を全て抹消する」
「後はルールが変更されたり追加されるから気を付けるように」
「自身のステータスを表示出来るからよく見ておくように」
「クエストは通知もしくはクエストボタンがあるから見といてね」
そして、音声が終わった。
「マジで夢のまんまか」
木藤神樹はメッセージ音声を聞き終わるとため息をはいた。まさか夢での話が本当だったとは思いもよらなかった。
「さて、まずは入学式に行く準備をするか。半ドンだから昼飯も要らないし」
そういって制服へと着替え始めた。

第1章　4月　入学及び学校生活（仮）

能力確認と犯罪行為

俺はダイスと書かれたアプリに表示されている自分のステータスを眺めながら満員電車で運よく座れた席で考え事をしていた。

木藤神樹

職業：高校生　年齢：15

能力：石川五右衛門（権力者からの反逆盗賊）Lv1

強者からの強奪（アベンジャー・グリード）

初期取得技能

スリ74　ピッキング53　逃げ足78　小太刀72　変装73

ハッキング57　重力魔法66　気功72　目利き90　テレポート79

参考数値

1～20　素人もしくは一般人程度

21～40　駆け出しから中堅

41～60　中堅から熟練

61～80　熟練から超一流

81～100　天才から超人

『比較対照の数値と見比べるとアイツの言っていた運がいいと言った意味がよくわかるピッキングとハッキングを除けば本職並の実力あるし目利きに至っては本当に役に立つ』

俺はそうおもいながらスマホを閉じ懐から3つの財布を取り出した。そこには最低でも10万を超える万札が入っていた。

『目利きでどれだけ金持ちか探り手持ちがどれだけ入ってるか考えたら頭にうかんだ数字通り入っていてビックリしたは』

財布から現金を抜き取って財布は自宅で処分するために学生鞄に突っ込んだ。3つ財布をスリして50万位の金ができて俺はとても満足している。ありがとう、名もなきお金持ち様（笑）

しかし、今のところは能力の詳細がわからないんだよな。ネット情報（Ｗｉｋｉ参照）で調べたが豊臣に喧嘩売りまくって釜で茹で殺しにされた義賊紛いの盗賊扱いだからな。確かに名前の通り権力者＝強者って図式で間違いはないはずだと思うがどういった能力か全く分からないだよな。

「・・めて」

うん？何か女性の小声が聞こえた気がするな。

「・・・やめてください」

今度も小声だったがはっきり聞こえた。まさか、痴漢か？朝っぱらからお盛んだな。俺は声が聞こえた方に目線とスマホを向けた。そこには４０台ぐらいのおっさんが気弱そうなメガネ美人（仮）女子高生のスカートの中まで手を入れてお尻を撫でているのが見えた。

『おいおい、マジかよ。俺も犯罪者の一員だがやっちゃダメだろ』

※スリも痴漢も軽犯罪には変わりありません。どちらも犯罪なためやってはいけません

『さて、証拠も抑えたし。現行犯で話を聞きますか』

俺はそう思い席から立ち上がって痴漢の現行犯で捕まえるためにスカートの中に入れている手を掴んだ

「オッサン、痴漢はあかんぞ。このまま、警察にいくか？」

俺はドスの効いた声でオッサンをビビらすために大声で叫んだ。

「な、何をする君は!?」

突然犯行がバレた上に掴まれたせいか俺のドスの効いた声が聞こえておらず狼狽しながらも大声でそう返した。

これは失敗したかな？と思っていると

「そ、そうです!!この人が私のスカートの中に手を入れてきたんです!!」

おお、まさか気弱そうな女子高生がここまで大声で宣言するとは。しかし、効果的だな。周りの目がこっちに集まった。一応、実行犯をしっかり掴んでおかないとな。このオッサンはまだ観念する気がないみたいだし

「俺がそんなことするはずないだろう。これは冤罪だ!!証拠はあるの

か？」
「あるから赤の他人の俺が捕まえてるんだろ。もうすぐ駅だからそこで一旦話し合おうか。被害者の君も良いよね？」
「わ、分かりました。ただ、出来たら早く終わらせたいです」
　女子高生は顔を真っ赤にしながらもハッキリと意思を示した。これなら有利に進められそうだな。
　数分しないうちに駅についた。勿論、その間もオッサンの腕を掴んだままだ。オッサンはオッサンでこの場から逃げようと必死であがいたがおもいっきり握り絞めると痛みで膝をついた。ざまぁｗｗ。そのまま、駅に降り駅員さんに事情を説明して保安室入った。
「で、まずは君の名前を教えてもらえないかな？オッサンは免許証と働いてる会社の名刺か証明書を出せ」
「私は岡村美紀です」
「ふん、お前みたいな若造が仕切ってるのか知らんが俺は出さないからな」
「オッサン、まだ自分の立場が分かってないのか？まぁ、岡村さんの要望でどうするかきめるが。どうしたい、岡村さんはおのオッサンを刑務所送りにしたいかお金で許すか？」
　岡村さん少し考えると
「出来たら捕まって欲しいですけどお金で解決してあげても良いですよ。条件は付けますけど」
「だから俺はやっていないと言っているだろう!!」
　オッサンは怒りのままに机を叩きつけた。往生際が悪いな。これ見てもそれが言えるかな？（笑）
「オッサン、俺が現行犯だけであんたを捕まえたとでも思ってるのか？なら、これはどう言い訳するんだ？」
　俺はスマホで写した痴漢の犯行がバッチリ（顔付きで）撮れている写真を何枚か見せつけた。それを見た瞬間顔が赤から黄色そして青へと変化していった。それを確認すると直ぐにスマホを懐に入れた。トチ狂ってスマホを壊されたら証拠が飛ぶ可能性があるからな。
「さて、身分証明書と現在働いてる会社の名刺か証明書を出して貰お

うか」
　その時の顔はとっても悪人面だったと保安員のオッチャンが伝えてくれた。いや、いいんだけどね
「萩原祐輔４３才。へぇ～、一流企業の取締役員ですか。これは、痴漢何かで捕まったらイメージが悪くなって解雇されるでしょうね。しかも、ネットなんかに流出しようものなら一生後ろ指を指されながら低収入で働くはめになるかもしれないですね」
「頼む、何とか示談で済ませてくれないか?さっきまでの態度は謝る」
「そうですね、俺の提案と致しましては上司にこの事を報告した上で一時警察に事情聴取を受けてもらった上で一時被害届を提出。そして、今日から１３日間の間に示談金の調整を行うでどうでしょう。勿論、こちらの岡村さんがその金額に納得するならいいいですが?もし、岡村さんが交渉をこちらに一任してくれるのなら警察の事情聴取だけでいけますよ」
「お願いします。出来たら親に知らせたくないので」
「分かりました。では萩原さん、貴方は幾らでこれを収めますか?」
　オッサンは少し考えると手の平を開いて
「５０万ならどうだ?」
　とほざた。一般人相手ならそれでも通ったが俺の前でやったのが運の付きだな
「桁が一つ足りませんね。彼女の精神的苦痛や恐怖感、未成年に対しての公然わいせつそれを鑑みて５００万ですかね。勿論、今すぐにお支払できるのであればですが」
「桁がでかすぎるだろう!?そんな大金払えるわけない」
「なら、今すぐにでもあなたの会社に電話を入れて上司の方にこの件を話した上で弁護士を通すことになるでしょう。勿論、前科者として経歴が傷つき今の会社もやめることになるでしょう。どうしますか?」
「それはやめてくれ。俺には妻も子供も居るんだ」
　その言葉を聞いた瞬間、チャンスだと思った。まさか、相手から自分の弱点を話してくれるなんて

「それは大変ですね。奥さんがこの事を知ったら確実に離婚沙汰になるでしょう。勿論、慰謝料も払わないといけない。お子さん何かは痴漢を行った犯罪者の子供のレッテルを貼られて虐められたり非行に走るでしょうね。貴方が痴漢をやったせいで。どうしますか？即金とは言いませんが払う気にはなりましたか？」
「分かった必ず払うだから会社にも家族にも伝えないでくれ」
「分かりました、それでは今から証拠としてスマホで動画を撮るのでしっかりとこう復唱してください」
「「私は痴漢行った性犯罪者です。痴漢の被害者に示談金５００万円を４月１２日までにお支払することを約束します。約束が破られた場合はどの様な罰も受ける所存です。その代わり示談金をお支払することが出来たのであれば会社及び家族、痴漢にあった旨を知らせることを禁止し被害届も即刻取り下げ、提示した証拠などを一切破棄する事を約束を受け入れていただきました」」
　俺の言葉に萩原（性犯罪者）は一言一句間違えずにスマホのカメラに向かって復唱した。
「それでは身分証明書はコピーを撮ったのでお返ししますが少しお待ちくださいね」
　俺は萩原の目の前でとある所に電話をした。
「もしもし、こちら＊＊＊（萩原の会社）ですが」
「あ、すいません。＊＊商事の＊＊（偽名）なんですけども、取締役員の萩原祐輔さんは出勤されてるでしょうか？」
「いえ、まだ出勤されておりません。何か緊急のご用心でしょうか？」
「いえ、もし出勤されましたら一度こちらのお電話に（１３時頃）にお電話を頂けるようお知らせしていただけないでしょうか？契約についてもう一度確認をしたいと言っていたとお伝えください（時間は聞こえないよう小声で）はなしてます」
「分かりました、お名前をもう一度お伺いしても宜しいでしょうか？」
「＊＊（偽名）です。それでは朝早く用件を聞いていただき有難うございます」
「それでは失礼いたします」

わざわざ、こいつが聞こえるように話した。一応、とんずらをこかないように予防線と本当にそうなのかの確認だ
「おい、会社に連絡を入れない約束だろう」
「だから痴漢の内容じゃないだろ。わざわざ、受付の人には嘘をついたんだ。会社の電話で俺の電話に連絡を入れた信用してさっきの日付まで待ってやる。ただし、被害届事態は学校終了後出しにいく。勿論、金が用意でき次第彼女がどうするかわからないが受けとる。勿論、ここのパソコンを借りて今すぐにでも示談書類をプリントアウト致します。保安員の方すいませんが構いませんか?」
ここまで思いっきり私物化していたが本来は警察と弁護士案件である。本来は高校生のガキ一人がやることではないが保安員の方は快くパソコンを貸してくれプリンターでプリントアウトした。勿論、さっきと同じ内容を書き記し拇印と印鑑、サインを書かせて解放した。
(このようなことがあればすぐさま警察及び弁護士に連絡入れるのが最善です。加害者でも被害者でも)
現在の時刻8：30分か7：30ぐらいに事件(獲物)に会ってから一時間ぐらいか。本当に美味しいな
「さっきはありがとうございました」
「岡村さんか。いいよ、君の勇気が無かったら俺は名誉毀損で逆に逃げるはめになっていただろう。それにもしお礼がしたいなら今回入る可能性があるお金の一部をくれたらいいよ。そうだね、アイツが払う金額にたいして2割でどうかな?」
「いえ、それだと少ないですよ。私はほとんどやってないんですから。そんなに頂けません」
「いや、君にはさっき受けた辱しめを警察官に話さないといけないからそれを考えるとね」
俺も流石に彼女なしだと計画通りに運べないからそれぐらいしか取り分として受け取れないからな。
「分かりました、そう言えば貴方は私と同じ学校ですね。何科ですか?

「俺は普通に普通科だ。そっちは何科かな？」
「私も普通科ですよ。といっても内部進学ですけど」
「へぇー、それならお金持ちなんだ」
俺が通う高校の普通科は半分が内部進学でその殆どが金持ちのお坊ちゃんお嬢さんの集まりだ。そんなことより
「そろそろ、学校に向かわないと入学式に間に合いそうにないぞ」
「そうですね、それでは歩きながら話しましょ」
そういって学校に向かった

入学式と裏事情

私立城東学園

そこははっきり言ってカオスの一言である。学科の数は日本最多で農業科、経済科、商業科、水産科、国際科、情報科、芸能科、体育科、芸術科、料理科、ファッション科、電子科の１１学科が存在する。偏差値もその学科によって変動するが普通科は平均より上な６０前後である。その中でも内部進学と外部受験者が存在し、内部進学は小学生から入学したもので構成されその殆どが会社経営者か有名人のご子息で固められており高校で外部受験した者の６割はそんなことを知らずに受験しており外部入学で合格すれば入学金無料＋授業料無料など殆どの学校施設が内部進学者の親が払ってるお陰で無料とあって貧乏な成績優秀者が集まった。

「まぁ、甘い話には苦い裏事情があるって相場がありそうだが」

俺自身、入学式に参加してそう思った。まず、内部進学者（以後内部）と外部入学者（以後外部）の椅子が違う。内部はフカフカの椅子に座っているが俺達外部は普通のパイプ椅子で前列が内部席、後列が外部席と分けられており学校パンフレットの写真も前列のみが映されていた。しかし、分かりやすい差別いや区別だな。まぁ、このくらいは普通に予想できたからいいが中身まで内部贔屓が酷すぎるとめんどくさそうだな

「まぁ、こっちもよほど酷い仕打ちをしてこない限り無視するつもりだが」

区別（差別）があるのを承知で入学してるし、こっちに傷が残る傷害行為や社会的地位が大幅に下がる行為を行わない限りは無視をするつもりだ。相手にする気も起きない

入学式もつつがなく終わるとクラス別に移動することになった。俺のクラスは１年Ａクラスだった。プリントに書かれた席に座ると教壇に初々しい美人女性教師が自己紹介を始めた

「始めまして、私は君たちの担任になった黒川百合です。クラスは初めて受け持つけど出来る限り頑張るからヨロシクね。それじゃあ、ま

ずは自己紹介しましょう。右端からお願いね」
　うん、凄い世間知ら・・・ゲフンゲフン純粋そうな教師だな。この、利権争いが激しい学園に来る人間じゃないだろう。まぁ、そんなことより暇潰しにクラスの人間分析しておくか事前情報だと普通科５クラス３０人であるが内部：外部＝５：５だが今年は普通科の各クラスに理事会の子供が１人づつ入ってきている。その中でも俺が最も嫌いな奴が入ってきていた。
「僕の名前は濱田佑樹と言います。僕の目標はこのクラスで切磋琢磨出来るような関係で仲良くしていきたいです」
　こいつである。濱田佑樹、親は理事の中でも一番力がある濱田正哉で外面は品行方正、成績優秀、文武両道、才色兼備で通しているが裏ではクラスを裏で支配していて色々していた。親の真似で金に権力、取り巻きを使って暴力も行い揉み消しや圧力をかけて自分に逆らう人間を何人も消している。別にそれはいいがやり方が好かない。そりゃ、権力に関しては親の名前を使って使うのはまだ理解を出来るが金は自分で稼いだ金ではなく親の金だし消し方も雑でイライラするがわざわざ、敵対するつもりはない。で、取り巻きは何人かいるがこいつは別格だ。
「俺の名前は須藤剛田だ。空手をやってるから全国大会に出たら見に来てくれ」
　その１人が須藤剛田だ。見た目は粗暴で言動も不良といった感じだが力は強く空手も有段者で中学の時も全国大会常連で全国制覇もしているが他校の生徒を何人も潰している。しかも、須藤にその件を揉み消しを行って貰って警察の手を逃れてる。しかも、女も色々クスリや力ずくで喰ってる可能性があるためあまり近付きたくない。まぁ、モテるかも知れんが嫌いだな。他の取り巻きも色々悪いことをやってるみたいだがこの二人に比べたら小物なため気にしていない。
　最終だった俺も自己紹介を無難に終わらせこれから一週間のスケジュールが書かれたプリントを渡されて今日は解散となった。ついでに岡村さんとは違うクラスだった